東京大学教養学部　主題科目　全学自由研究ゼミナール

こまとちゃんゼミナール

～ 駒場図書館で学ぶ大学生の為の情報検索・収集・発信スキル

2022年度Sセメスター 成果発表冊子

「こまとちゃんゼミナール」
2022年度Sセメスター 成果発表冊子

目 次

「こまとちゃんゼミナール」とは？ ／ 本冊子について　1

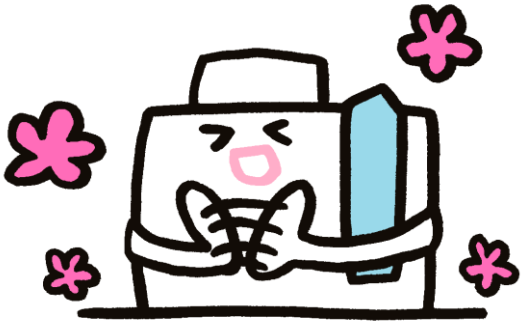
2022年度Sセメスター　授業プログラム　2

展示会場風景　3

情報化社会と教育　4

「安楽死」～最期の迎え方～　10

インターネット上の情報伝達　14



駒場図書館公式キャラクター
「こまとちゃん」

こまとちゃんイラスト　　東京大学駒場図書館
図書書影　　“版元ドットコム” https://www.hanmoto.com/

「こまとちゃんゼミナール」とは？

「こまとちゃんゼミナール ~駒場図書館で学ぶ大学生の為の情報検索・収集・発信スキル」は、教養学部生のホームライブラリーである駒場図書館を活用しながら、大学での学習、研究はもちろん社会に出てからも役に立つ情報の検索収集、そして活用の技術を身に付けるための授業です。駒場図書館、総合図書館、そして情報基盤課学術情報チーム等、多くの方々の協力のもとに実施されております。
学期の後半では情報活用・発信実習として、また図書館と学生の協働の試みとして、駒場図書館の展示スペースをお借りして、展示企画の制作を行っています。

参考URL
http://www.sr.komex.c.u-tokyo.ac.jp/courses/library/

本冊子について

本冊子は、2022年度Sセメスター授業の成果発表として、東京大学駒場図書館にて2022年7月14日から7月28日まで開催されたパネル展示の内容をまとめたものです。チーム毎にテーマを設定し、駒場図書館所蔵資料を中心に関連する資料を収集して、紹介文の執筆、展示パネルの作成を行いました。
テーマは受講生の関心に沿って多岐にわたっています。駒場図書館の所蔵資料について知るのはもちろんのこと、図書館と学生の協働について考える機会となれば幸いです。

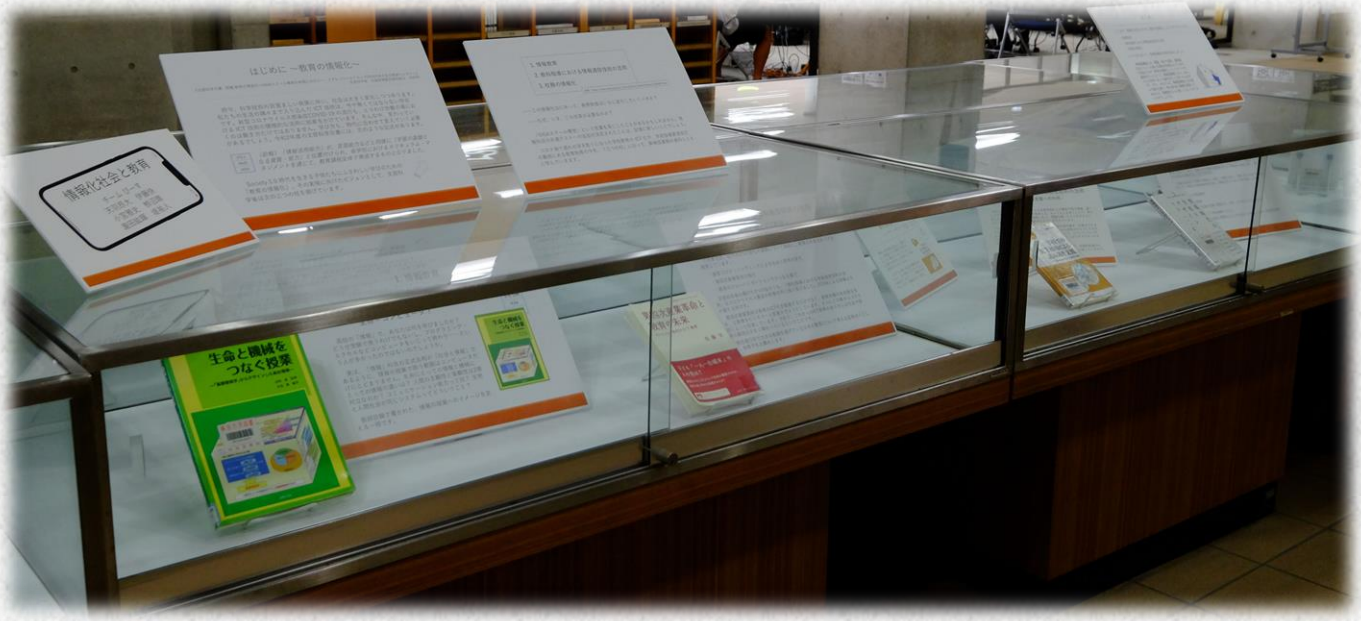
展示および冊子作成にあたり、書影等の使用については許可を得ています。
また展示会の実施および準備には駒場図書館の皆様に多大なご協力をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

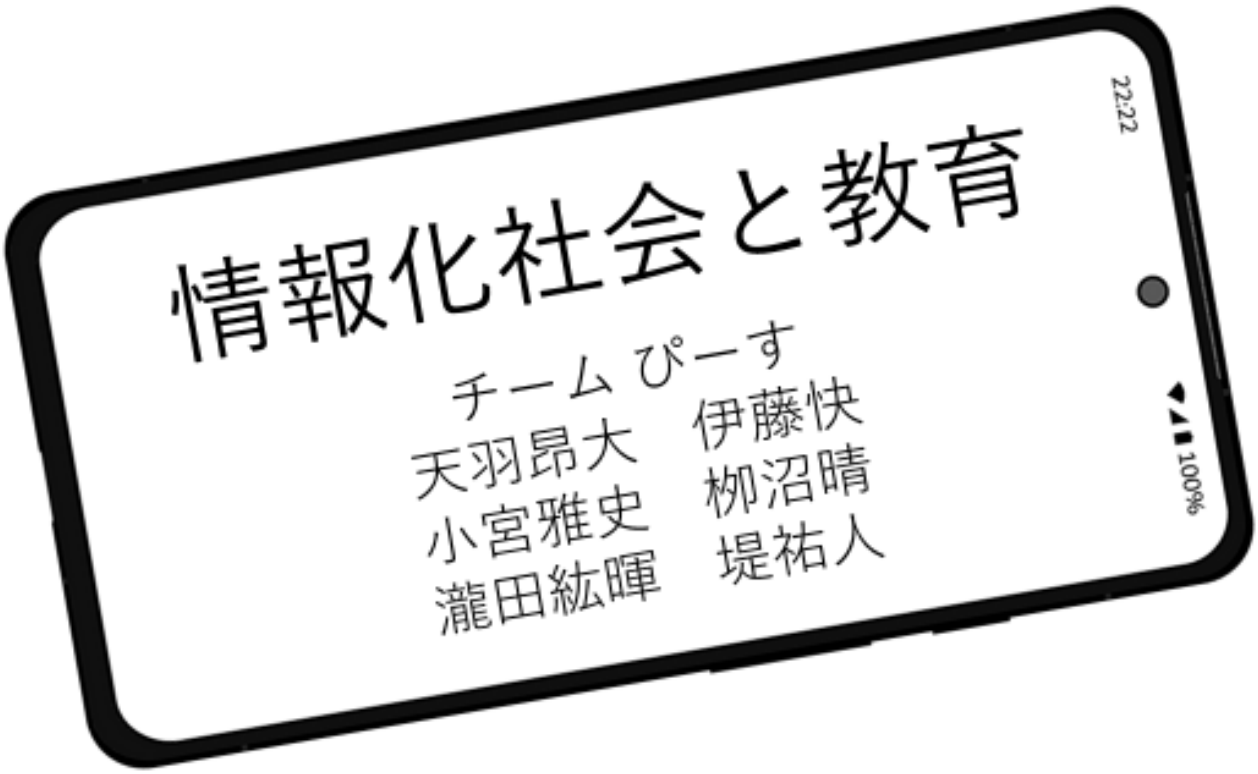
担当教員　山上揚平

2022年度Sセメスター 授業プログラム

回・日程	内容
第1回（4/7）	ガイダンスと導入講義（オンライン）
第2回（4/14）	図書館の資料を知る（オンライン）
第3回（4/21）	図書・雑誌の探し方
第4回（4/28）	データベースの活用①（講義）
第5回（5/12）	データベースの活用②（実習）
第6回（5/19）	レファレンスサービスについて（講義・ワークショップ）
第7回（5/26）	資料の探し方（総括）
第8回（6/9）	情報活用・発信実習①（チーム決め、テーマ設定）
第9回（6/16）	情報活用・発信実習②（展示に向けた準備作業）
第10回（6/23）	総合図書館ツアー
第11回（6/30）	駒場図書館バックヤードツアー
第12回（7/7）	情報活用・発信実習③（パネル制作）
第13回（7/14）	情報活用・発信実習④（最終プレゼンテーション／展示会場設営作業）

展示会場風景





情報化社会と教育

チーム ぴーす
天羽昂大　伊藤快
小宮雅史　柳沼晴
瀧田紘暉　堤祐人

はじめに ～教育の情報化～

『文部科学白書：特集：教育の情報化～GIGAスクール構想の実現に向けて～
：ラグビーワールドカップ2019日本大会の軌跡とレガシー』
文部科学省　全国官報販売協同組合　2020年

昨今、科学技術の目覚ましい発展に伴い、社会は大きく変化しつつあります。私たちの生活の隅々まで入り込んだ ICT 技術は、今や無くてはならない存在です。新型コロナウイルス感染症COVID-19 の流行も、とりわけ労働の場における ICT 技術の積極的な活用に拍車をかけています。そんな中、変わっていくのは働き方だけではありません。学び方も、時代に合わせて変えていく必要があるでしょう。令和2年度の文部科学白書には、次のような記述があります。

373.1
Mo31
2020

（前略）「情報活用能力」が、言語能力などと同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けられ、各学校におけるカリキュラム・マネジメントを通じて、教育課程全体で育成するものとなりました。

Society 5.0 時代を生きる子供たちにふさわしい学びのための「教育の情報化」。その実現に向けたビジョンとして、文部科学省は次の三つの柱を掲げています。

1. 情報教育

2. 教科指導における情報通信技術の活用

3. 校務の情報化

参考：https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1369603.htm

――この情報社会にあって、教育制度はいかに変化していくべきか？

――なぜ、いま、この改革が必要なのか？

「GIGAスクール構想」という言葉を耳にしたことがあるかもしれません。情報科目の共通テストへの追加が決定されたことは、記憶に新しいことでしょう。

コロナ禍で遅れが浮き彫りになった学校教育のICT化や、学習指導要領改訂の裏側にある教育制度の今を、教育の情報化の「三つの柱」に沿って、駒場図書館の資料とともに学んでいきます。

（堤）

1. 情報教育

『生命と機械をつなぐ授業：「基礎情報学」からデザインした高校情報』
中島聡　高陵社書店　2012年

生命＝コンピュータ？

375.199
N34

高校の「情報」で、あなたは何を学びましたか？どうせ受験で使うわけでもないし、プログラミング・エクセルなどコンピュータをいじって終わり……という人が多かったのではないのでしょうか。

実は、「情報」科目の正式名称が「社会と情報」であるように、情報の授業で扱う範囲はコンピュータだけにとどまりません。生命にとっての情報と機械にとっての情報の違いは？人間の主観性と客観性は2項対立なのか？コミュニケーション能力って何？生物と人間社会が同じシステムってどういうこと？

教師目線で書かれた、情報の授業へのイメージを変える一冊です。

（伊藤）

2. 教科指導における情報通信技術の活用
- コロナ禍とICT教育 -

『第四次産業革命と教育の未来：ポストコロナ時代のICT教育』
佐藤学　岩波書店　2021年

この本では、以下の3つの変化の連関を議論し、教育の未来のあり方を模索しています。

・新型コロナ・パンデミックによる社会と教育の変化
・第四次産業革命の進行
・経済のグローバリゼーションのさらなる進行

文部科学省の掲げた3つの柱のうち、「教科指導における情報通信技術の活用」はコロナウイルス蔓延の影響を特に強く受けました。ZOOMによるオンライン授業はその最たる例です。

375.199
Sa85

第四次産業革命は教育のICT化を推進するだけでなく、教育市場の急成長を生み、公教育をビジネスへと変貌させようとしています。さらにこの動きはコロナ禍によって加速しています。つまり、これからのICT教育のあり方には社会や経済の動向が大きく関わっているということです。

現在進行形で大きな転換を遂げている日本の教育について考える足掛かりとして、本冊子をお薦めします。

（天羽）

2. 教科指導における情報通信技術の活用
- コロナ禍とICT教育 -

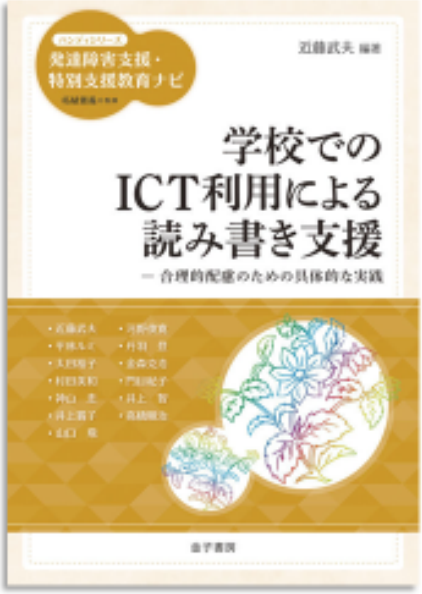
『学校でのICT利用による読み書き支援：合理的配慮のための具体的な実践』
近藤武夫　金子書房　2016年

教育へのICT活用の話になると、暗黙のうちに「健常者がいかに効率的に学習できるか」という議論になりがちです。しかし、むしろ障がい者の方が、ICT活用により受ける恩恵は大きいかもしれません。

この本では、障がい者自身に問題があるのではなく、周りの環境とのミスマッチにより障害が生じるのだという、「障害の社会モデル」に基づいて議論が進められています。

例えば、読み書きが苦手な人は音声読み上げ機能やキーボードなどを使うことで、他の多くの人と同じように授業を理解したり、問題を解いたりできるようになっていくことが、数多くの事例とともに示されています。

378
Ko73



今までの学校教育は、五体満足であって文字の読み書き、計算ができるという暗黙の前提の上に成り立っており、そこから排除される人たちを生んできました。しかし、ICTをうまく活用することで、こうした人々に学びの機会を提供し、さらには彼らに自信を与えることができるかもしれません。

ICT活用がひらく新しい可能性と活用の具体的な方法、合理的配慮の公平性について、複数の専門家が各々の実践を踏まえながら語ってくれます。

（瀧田）

3. 校務の情報化

『情報時代の学校をデザインする：学習者中心の教育に変える6つのアイデア』
C.M.ライゲルース, J.R.カノップ　北大路書房　2018年

この本は、文部科学省が掲げた3つの柱のうちの「校務の情報化」に関連する事項に触れています。校務にICT技術を活用することで教職員の負担が減り、働き方改革を実現することができます。

日本における「校務の情報化」は新しい概念であり、文献も多くはありません。そこで、米国での実践事例等が詳しく解説されているこの本を紹介します。

〈米国での実践事例〉

・成績表の管理
　…… 自動で更新が行われ、分析や出力も可能。
・パーソナライズド統合教育システム
　…… 生徒の教育を包括的に管理できるシステム。
　　日本の「統合型校務支援システム」に近い。

（柳沼）

おわりに

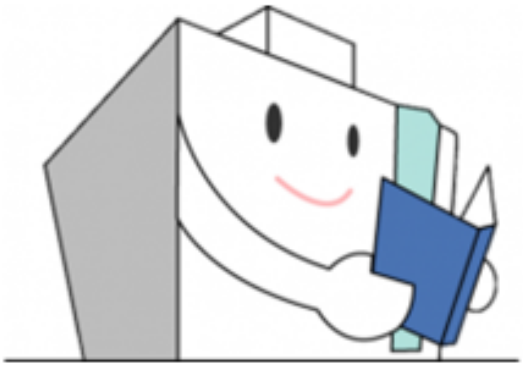
ここまで、情報化社会における「教育の情報化」というテーマについて、

・情報教育
・教科指導における情報通信技術の活用
・校務の情報化

という3点に絞って、それぞれに関連する駒場図書館の資料を紹介しました。

駒場図書館には、書籍、省庁の資料、雑誌論文などといった様々な資料が所蔵されています。今回、私たちが「教育の情報化」というテーマで調査を行ったように、駒場図書館でなら、みなさんの目的にあった資料がきっと見つかるはずです。

ぜひ、みなさんも駒場図書館に足を運んで、資料を探す、東大OPACで蔵書を検索してみるなど、図書館をもっと使いこなしてみてはいかがでしょうか。



（小宮）

重要

00 「安楽死」～最期の迎え方～

新興感染症や戦争を始め、ますます世の中の不確実性が加速するなか、普段の生活で「生きること」について思いを巡らす機会も少なくないのではないでしょうか。
本展示では駒場図書館所蔵の「安楽死」をテーマとした本を紹介します。「生きるとは一体どのような意義を持つのか？」
これから紹介するバラエティー豊かな本を通じて、是非この問いに迫ってみてください。（西田）

くまさんチーム：宇佐美　大竹　鈴木　長野　西田　藤田　吉越

01 医者と患者の思い

『だから、もう眠らせてほしい－安楽死と緩和ケアを巡る、私たちの物語』
西智弘　晶文社、2020年。

「緩和ケア医」：がん患者の精神的・身体的苦痛を和らげるための治療を専門とする医者
ある膵臓癌患者の女性が、安楽死を求め、著者のもとを訪れた。緩和ケア医として自発的な死を無くすことを理想とする著者は、10日間の入院生活で最善を尽くすが、彼女の意思は固かった。著者は最期の日に彼女に尋ねる。
「安楽死制度は、なくてもよいと思われていますか?」
返ってきた答えは…?　安楽死の現場から、医者と患者の両者の思いを追えるエッセイ。（長野）

02 死ぬ権利は保障されうるか？

『尊厳死および安楽死を求める権利』
松井茂記　日本評論社、2021年。

もし自分が耐え難い苦痛にさいなまれていても死を選べない状況にあったら、または、そんな患者に向き合わなければいけない医者であったら、どんな思いでどんな行動をとりますか？

また、尊厳死や安楽死が認められてしまえば、弱い立場にある人は自らの意思に反して、他人の迷惑にならないようにと死を選んでしまう危険性も少なくありません。しかし、その危険性を取り除く代償として、患者に著しく耐えられない苦痛を我慢しつづけることを強いることが正当化されるべきなのでしょうか？

こうした問いが存在する中、本書の著者は、尊厳死や安楽死の導入を支持しており、実際の海外の事例などを交えたり、様々な立場の人の見解に触れたりしつつ説明されており、納得感を持って読み進めることができます。憲法のことも多く取り上げられているので、そういった分野に興味がある人にも手に取ってほしい一冊です。（藤田）

03 死ぬ「権利」の何が問題なのか？

『死ぬ権利はあるか　安楽死、尊厳死、自殺幇助の是非と命の価値』
有馬斉　春風社、2019年。

「安楽死」と聞いてみなさんは何を思い浮かべますか？
では「尊厳死」なら何を思い浮かべますか？

現在の日本では積極的安楽死、消極的安楽死、尊厳死、平穏死、自然死、自殺幇助などの様々な語句が錯綜し、人々の認識は混乱をきたして、事実が見えにくくなっています。細心の注意を払いながら「患者の死期を早めうる医療者のふるまい」に正面から向き合うこの本は賛成側の3つの主張と反対側の2つの主張を取り上げ、最終的には後者の立場を支持します。

個別具体から一歩引いて理論的に「安楽死」を見つめてみませんか？

「安楽死」に対する学者それぞれの立場や意見を俯瞰するという点でも役に立ちます。文献一覧から次に参考にしたい資料を探してさらに深く調べていくことができます！
（大竹）

04 オランダの「よき死」とは？

『生きるための安楽死 オランダ・「よき死」の現在』
シャポットあかね　日本評論社、2021年。

10歳の子を安楽死させた親の体験談
精神疾患に苦しむ若い患者の自己安楽死
認知症患者の安楽死
19歳が自殺に用いた200円の薬
オランダ在住の著者が伝える衝撃的な最新安楽死事情

本書は『安楽死を選ぶ－オランダ・「よき死」の探検家たち』(2014)の続編にあたり、オランダの安楽死・自己安楽死の歴史と現在を豊富な事例を用いて紹介しています。日本の「ALS患者嘱託殺人事件」（2019）の悲劇は、病に苦しみ死を望んだ女性が「彼女を愛し、支援し続けてきた人たちと、死にたいという気持ちについて正面から語り合えなかったこと」と語る筆者は、死について話し合うことをタブー視しがちな日本人に、生きるための死の在り方について問いかけてきます。

あなたもこの本を読んで、自分自身の「良き死」について思いを巡らせてみませんか？（鈴木）

05 思想家は生と安楽死をどう分析する？

『ホモ・サケル：主権権力と剥き出しの生』
ジョルジョ・アガンベン；高桑和已訳　以文社、2003年。

アガンベンは人の身体の一つの側面として、単に生物学的側面での体を指す「剥き出しの生」という概念を考えます。そしてその「剥き出しの生」が実現され、権力が政治的に法を度外視して法規範を経ずに力を行使する状態である「例外状態」が存在するのではとの分析を行います。その上で「例外状態」が一方では、ナチスの強制収容所での市民権を奪い法的な権利をなくして不可視的存在へと貶めたユダヤ人の殺害、他方では「生きるに値しない生」として法的価値が縮減された存在を殺す事であると彼が分析する所の安楽死に見られると指摘します。

安楽死について考える際、ガイドラインや法制度を、国・病院など力のある他者が整備する事によって、ある患者が「生きるに値しない」という評価が決められてしまう事につながることの恐ろしさには目が向けられることは少ないかもしれません。しかし、一見自己決定に思われることであっても、見えない権力が働いていると考えたときそれは本当に自己決定であるのか、という問いが生まれるように思われます。人の生き死にについて決定を下すことにどのような意味があるのか、新たな視点を手に入れて考えませんか？（宇佐美）

06 「安楽死」という名のもと、過去には何が起こった？

『「価値を否定された人々」ナチス・ドイツの強制断種と「安楽死」』
中野智世、木畑和子、梅原秀元、紀愛子　新評論、2021年。

本書で扱っている「安楽死」は、現在日本で導入が議論されているような安楽死とは定義にずれがあります。ここでは、戦時中にナチス政権下で秘密裏に行われた病者・弱者の大量殺害を指しています。この「安楽死」は優生学思想や、それを背景とした強制断種政策の延長で行われました。この本ではナチスの「安楽死」の歴史的事実はもちろん、犠牲者や実行した医師たちの経験、政策が採用された思想的背景などを交えながら、「安楽死」を様々な角度から論じています。

19世紀末に瀕死の患者への素朴な同情からとなえられた「死の権利」。それがどのようにして、患者の「生きる価値」という基準を内包してゆき、精神疾患患者や障害を持つ人々の大量殺害に至ったのか・・・。現代の日本と同一に論ずることはできませんが、今日の議論でも見落とせない点は十分にあるはずです。（吉越）

インターネット上の情報伝達

かつて一部の人しか使えなかったインターネットは、スマートフォンの普及やSNSの登場で徐々に一般化し、今や日常生活の重要な一部となっています。授業やサークル、アルバイトの連絡が全てインターネット上で行われるのも日常茶飯事です。しかし、お互いの表情がわからないインターネット上でのコミュニケーションでは、クエスチョンマークひとつの有無で文章の意味が大きく変わり、意思疎通に齟齬をきたすことも多々あります。また、同世代の間であっても絵文字の使い方に差があり、ある種の「文化」の違いを感じることもあります。インターネットを使って調べ物をしていても必ずしも信頼できる情報を得られるとは限りません。インターネットの使用が当たり前になってだいぶ経っても、私たちはその膨大な情報網を完全に使いこなせているわけではないのです。

チーム「紙だのみ」は、「インターネット上の情報伝達」をテーマに、2010年以降に出版された書籍をご紹介します。今後の変化に対応できるよう、紙に頼らないコミュニケーションが今までもたらしたものを振り返ってみませんか。

チーム・紙だのみ

酒地晴登　原田萌恵子　末松寛喜
森岡航　森平梨紗子　矢内旅歌

日本的ソーシャルメディアの未来

濱野智史・佐々木博 著
ソーシャルメディア・セミナー 編
技術評論社出版　2011年

2010年のセミナーをもとにしたこの本は、会話のような文体で書かれておりとても読みやすい一冊です。『インターネットって、何？』といった根本的な疑問から、ジャニーズオタクのコミュニティでだけ伝わる顔文字や、おじさんがSNSを使いこなせない理由まで、＜コミュニティ＞（共同体）と＜ソサエティ＞（社会）の違いを軸に日本のソーシャルメディアの特徴について語られています。丁寧な用語の説明があるため、社会学などの知識が全くない状態でもすらすらと読むことができます。

特に50年後について考える最終章では「mixiやTwitterやニコニコは残るだろう」「Wii Fitのようにゲーム化されたレコーディングダイエットが登場するのではないか」といったような予想が述べられています。これらの予想の中には2022年現在で実現しているものもあれば、全く違う結果になっているものもあります。決して新しい本ではありませんが、あえて12年前に考えられていた「これから」と今を比べて読んでみるのも面白いのではないでしょうか。（矢内）

情報汚染の時代

高田明典 著
KADOKAWA　2014年

これからの情報社会を上手に生き抜くために必要な一冊です。

インターネットが発達した現在、私たちは膨大な量の情報を入手できます。その中には間違ったものも多くあるでしょう。そして、不適切な情報に惑わされたくない人は少なくないはずです。しかし、正しい情報と間違った情報はどう見分ければ良いのでしょうか。

本書の筆者は、私たちに害を及ぼす情報を「汚染された情報」と呼び警鐘を鳴らしています。情報の信頼性をどう判断するかがシステマチックに説明されているので、読んですぐに実践できるでしょう。また、情報がどのように汚染されるかについての基礎知識も得ることができます。自らの情報リテラシーに不安がある人はもちろん、自信がある人にも今一度読んでほしい本です。（森平）

若者言葉の研究：SNS時代の言語変化

堀尾佳以 著
九州大学出版会　2022年

現代の日本語、とりわけ若者言葉は「乱れている」と批判されることが多々あります。しかし本書では、若者言葉を単なる変化と捉えて終わらせるのではなく、多数の用例を収集した上で新たな日本語の規則・言語体系の構築を発見しようという試みがなされています。

例えば、「事故る」「ググる」「告る」のような新しい動詞を分析してみると、これらは名詞（省略されている場合もある）と「る」が組み合わさった形をしていて、いずれも五段活用をするという共通点があることがわかります。このことから、「一る」は「一する」と同じように名詞を動詞化する作用を持つようになったという考察を行うことができます。本書では他にも形容詞の新たな活用や副詞の意味変化、名詞化接辞の「一さ」などの様々な語法について分析がなされています。

情報通信技術の発展やSNSのスタンプ機能、予測変換などの拡充に伴って、新しい日本語は日々生み出され、広がっています。自らの言葉の使い方が近年どのように変化したかを振り返ってみると新たな発見があるかもしれません。（酒地）

デジタルメディアの社会学：問題を発見し、可能性を探る

土橋臣吾・南田勝也・辻泉 編著
北樹出版　2017年

インターネットが普及し、毎日の生活でスマホやパソコンが欠かせなくなった現代に生きる私たちは、日々大量の情報に晒されています。分からないことはなんでもネットで調べ、SNSで友達が今何をしているか知ることができます。趣味が同じ人とネットで繋がって交友関係を広げたり、ゲームや動画共有サイトで空いた時間をつぶしたり、ネットがあればなんでも出来ると言っても過言ではないでしょう。この本は、そうしたデジタル化社会を生きるために知っておきたい、デジタルメディアの問題点を提起しています。皆さんの日常に近いシチュエーションから問題点について考える構成なので、問題をよりイメージしやすくなっています。スマホから離れられない毎日で“スマホ疲労”を感じたことがある方も多いのではないでしょうか。そんな時に是非一度読んで頂きたい1冊です。（原田）

Googleの72時間：東日本大震災と情報、インターネット

林信行・山路達也 著
角川書店　2013年

2011年3月11日、東日本大震災。あの日から、日本の人々は家族や親戚の消息が分からなかったり、真偽不明の衝撃的な情報が流れたりする中で、不安な生活を強いられました。その状況に対し、Googleをはじめとする IT企業は、他の企業と連携し民間ボランティアと協働しながら、有用な情報を発信するプラットフォームを即座に作り出しました。しかしそうしたサービスは、ネットワークの不通の為にサービスがあるという情報自体が被災地に入ってこなかったり、デジタルに慣れない人には難しかったりして、思い通りに行かない点もありました。

この本は、そうしたIT企業の奮闘と民間の動き、そして被災地ではそうしたサービスの効果と生じた問題点について、関係者への綿密な取材を通して克明に示しています。災害が頻発する日本において、今後の災害対策に生かすべき欠かせない一冊です。将来IT企業に就職することを考えている人にも、SNS等で災害時の情報発信に協力したい人にも、ぜひ手に取って読んでいただきたいです。（森岡）

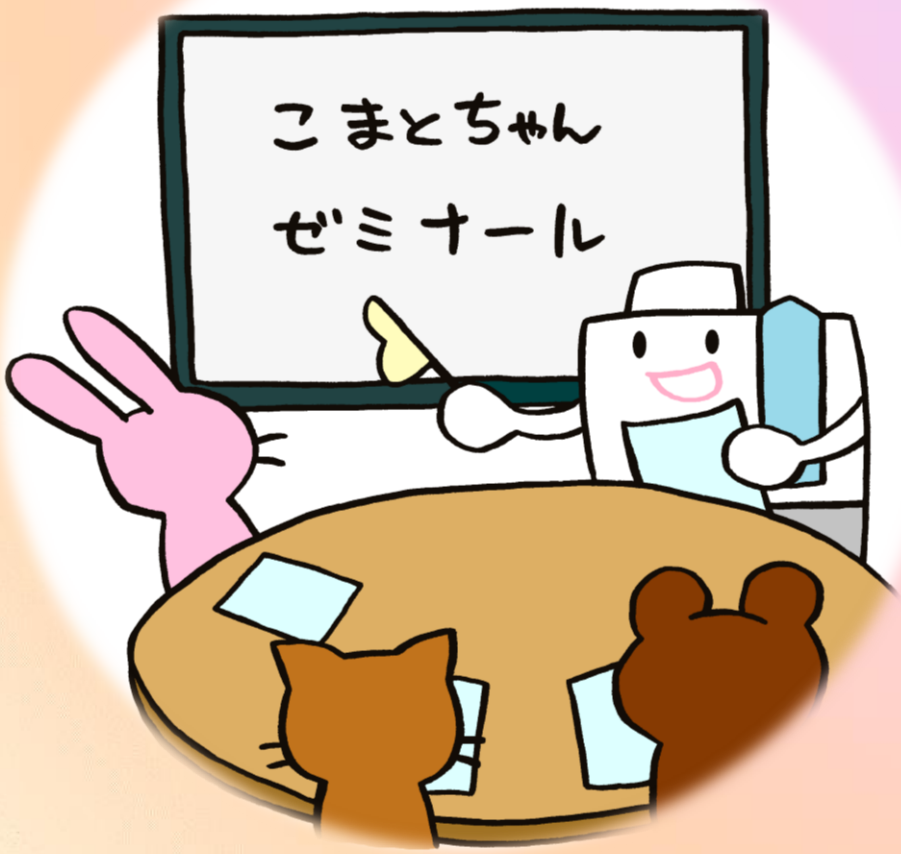
「くだらない」文化を考える：ネットカルチャーの社会学

平井智尚 著
七月社　2021年

「ネットカルチャー」、それはインターネット空間においてネットユーザたちの活動を通じて形成されてきた文化のことです。昨今インターネット技術は目まぐるしく発展してきましたが、ネットカルチャーについての研究は2000年代後半以降あまり勢いがありません。ネットユーザーたちの相互行為を通じて、独特な文化が形成され、再生産されてきたにも関らず、です。本書では、ネットカルチャー研究が主に行われていた2000年代前半の事例を参考にしつつ、2000年代後半以降のSNSなど近年発達が著しい分野についても考えていきます。

例えば、SNSによるオンライン・コミュニティとSNS以前のオンライン・コミュニティの違いについてご存じですか。

インターネット技術に流されるだけでなく、インターネットにより何が生まれ何が変化したのか、本書を通して考えましょう。（末松）



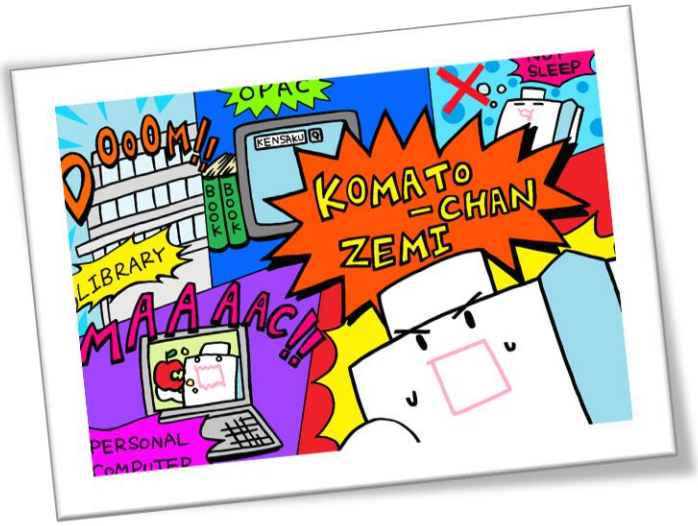
東京大学教養学部　主題科目　全学自由研究ゼミナール
こまとちゃんゼミナール
～駒場図書館で学ぶ大学生の為の情報検索・収集・発信スキル
2022年度Sセメスター 成果発表冊子

著者　堤 祐人、伊藤 快、天羽 昂大、瀧田 紘暉、柳沼 晴、
小宮 雅史、西田 真史、長野 希、藤田 大雅、大竹 晃平、
鈴木 希実、宇佐美 文彬、吉越 琳、矢内 旅歌、
森平 梨紗子、酒地 晴登、原田 萌恵子、森岡 航、
末松寛喜

編者　山上揚平

発行日　2022年9月1日
発行　東京大学教養学部　主題科目　全学自由研究ゼミナール
「こまとちゃんゼミナール」

発行所　〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 101号館12室
東京大学教養学部附属教養教育高度化機構社会連携部門
TEL 03-5465-8820　FAX 03-5465-8821


DOOOM!!
OPAC
KENSAKU
BOOK
BOOK
LIBRARY
SLEEP
KOMATO-CHAN ZEMI
MAAAAC!!
PERSONAL